

勤労婦人の妊娠, 分娩, 胎児に与える 影響に関する疫学調査

北海道大学産婦人科学教室

一 戸 喜兵衛・下斗米 啓 介
菅 原 卓・林 宏

I 研究目的

最近のわが国の産業の著しい伸展に伴って、婦人が広い産業面において直接これに携る傾向が強くなっており、特に有配偶者婦人の就業数が著増している。このため労働という要因が婦人の妊娠、分娩に対してどのような影響を与えるかという基本的問題が関心を集めているにも拘らず、未だ医学的な解析がなされていないのが現況である。一方また今後さらに既婚婦人の就業増加が予想されている今日、このことはますます重要な課題になりつつあると考えられる。

われわれは勤労婦人(以下職業婦人)と家庭婦人を比較して妊娠前の月経歴および妊娠中の母体の異常、分娩様式、分娩時の異常、新生児の異常などについて、両者に差があるか否かを統計的に比較検討し、また職種別、労働時間別にも検討を加えてみた。

II 調査方法

1. 調査対象は、本研究班の8大学(東北大, 東大, 名大, 近畿大, 京府医大, 広大, 久留米大, 北大)の産婦人科教室ならびに関連病院において、昭和55年9月から57年10月までに扱われた妊娠婦人から、面接によって得られた調査カードを資料として収集した。このうち職業と労働時間に関する記載が不十分な症例は除外し、職業婦人(3,689例)と家庭婦人(8,345例)について統計的検討を加えた。
2. 調査項目: 妊娠婦人の年齢分布, 月経不順の有無, 妊娠中の異常および合併症(切迫流・早産, 流・早産, 妊娠中毒症, 妊娠貧血, 糖尿病など), 分娩様式ならびに分娩経過の異常(分娩時間の延長, 出血量の異常, 前・早期破水など), 新生児所見(新生児仮死, 生下時体重, 先天異常, 重症黄疸, 呼吸障害など)について分析を行った。
3. 分析方法: (1)家庭婦人群と職業婦人群の2群に分けて比較分析した。(2)職業婦人を職種別に、①看護婦, 助産婦(387例), ②医師, 薬剤師, 技師(142例),

③教師(287例), ④保母(182例), ⑤事務一般(1,361例), ⑥自営業(247例), ⑦店員(295例), ⑧工員(79例), ⑨美・理容師(50例), ⑩農業(60例), ⑪その他にわけて、それぞれ家庭婦人と比較検討した。(3)また職業婦人のうち1日の平均労働時間が8時間以下の群(2,318例)と9時間以上の群(355例)の両者間、およびそれぞれと家庭婦人群間で比較検討した。

III 研究成績

1. 年齢分布

今回資料とされた職業婦人と家庭婦人の年齢は20才より5才区切りの分布でみると、両者とも25~29才にピークをもつよく一致した正規分布がみられた。

2. 妊娠前の月経不順

妊娠前に月経不順であったものの頻度については、家庭婦人14.9%, 職業婦人20.6%と職業婦人に高く($P < 0.01$), また労働時間が9時間以上の群では13.8%, 8時間以下では21.3%で、8時間以下の群では9時間以上の群ならびに家庭婦人群に比し有意に高い($P < 0.01$)。また職種別では保母ならびに美・理容師は家庭婦人に比して高い($P < 0.01$, $P < 0.02$)。

3. 妊娠中の異常

切迫流・早産, 妊娠中毒症に関しては職業婦人, 家庭婦人では差を認めない。しかし流・早産や糖尿病は職業婦人に多く, また妊娠貧血が家庭婦人に多い傾向が認められた(表1—①)。9時間以上の群では切迫流・早産, 流・早産が家庭婦人より多く, 妊娠中毒症は8時間以下の群に多かった(表1—②)。職種別の検討では, 流・早産が教師, 保母を除いた他の職種で多い傾向を認めた。

4. 分娩様式

職業婦人の自然分娩頻度は80.8%で, 家庭婦人の84.3%より低い(表2—①)。また9時間以上の群では家庭婦人に比べて帝王切開術が多く, 吸引分娩が少ない傾向を認めた(表2—②)。職種別では吸引分娩が看護

婦・助産婦，教師，医師，薬剤師，技師などに多い傾向があった。

5. 母体の分娩時の異常

前・早期破水，分娩時間の延長，分娩時異常出血について検討したが，職業の有無，職種による有意差は認めなかった。

6. 新生児所見

出生時体重についてはSGAは職業婦人4.6%，家庭婦人3.1%と職業婦人に有意に高い頻度であるが，8時間以下の群では4.8%とこの傾向は同様であるが，9時間以上の群では2.5%と家庭婦人よりも低い傾向であった。

LGAは職業婦人4.8%，家庭婦人5.7%と家庭婦人に多い傾向を認めたが，労働時間による差はなかった。

また出生時仮死は職業婦人7.9%，家庭婦人6.6%で職業婦人に多い。しかし重症黄疸，呼吸障害・嘔吐，先天奇形などについては差を認めなかった(表-3)。死産については職業婦人0.9%，家庭婦人0.7%と有意差がなく，労働時間による差も認められなかった。

IV 考 察

月経不順は職業婦人全般で家庭婦人より頻度が高く，勤労が婦人の生活環境に与える肉体的，精神的影響が少なくないことを示唆している。切迫流・早産の頻度が職業婦人全体では差がないが，9時間以上の勤労婦人群では有意に高く，また流・早産もこの群で著明に高いことは，妊娠持続期間に与える労働時間の長さないしは，労働量の因子はその大きさの影響が重要であることを物語っている。しかしながら，妊娠中毒症やSGAの発生頻度からみると労働時間のむしろ少ない8時間以下の群が家庭婦人および9時間以上の群に比べて不利な結果である。このことは勤労時間の多寡が直接的に妊娠中毒症の発生やSGAの発生に影響するのではなく，他の因子，たとえば摂取栄養量や1日運動量などにより左右される可能性も考えられるだろうし，帰宅後の潜在的仕事内容にもおよぶ問題をはらんでいることを示唆しており，勤労時間のみの区分ではその正確な労働内容，労働量の解析は充分ではない。したがって勤労時間の長いことだけが中毒症発生率低下に直接連なると考えるのは早計である。分娩様式については，職業婦人では自然分娩率が低く，ことに9時間以上の群で帝王切開の頻度が高くなっている。この原因については今回の調査で結論となるものはえられなかった。

V 要 約

1) 職業婦人では家庭婦人に比べ，①月経不順の頻度が高い。②流・早産，糖尿病合併が多い傾向がある。③自然分娩が少ない。④SGAが多く，LGAが少ない。⑤出生児仮死が多い傾向がある。2) 労働時間が9時間以上の妊婦は家庭婦人妊婦に比べて，①切迫流・早産が多い。②帝王切開が多い傾向がある。③SGAの頻度はむしろ少ない傾向がある。3) 8時間以下の群では家庭婦人に比べて，①妊娠中毒症が多い。②SGAが多い。

表1-① — 妊 娠 中 の 異 常 —

	職 業 婦 人	家 庭 婦 人
切迫流・早産	310/3464 (8.9%)	716/8293 (8.6%)
流・早産	249/3464 (7.2%)	459/8293 (5.5%) (P<0.01)
妊娠中毒症	432/3464 (12.5%)	965/8293 (11.6%)
妊娠貧血	303/3464 (8.7%)	823/8293 (9.9%) (P<0.05)
糖 尿 病	41/3464 (1.2%)	52/8293 (0.6%) (P<0.01)

表1-② — 妊 娠 中 の 異 常 —

	職 業 婦 人		家 庭 婦 人
	9 時 間 以 上	8 時 間 以 下	
切迫流・早産	41/355 (11.5%)	214/2318 (9.2%)	716/8293 (8.6%) (P<0.10)
流・早産	37/355 (10.4%)	119/2318 (5.1%)	459/8293 (5.5%) (P<0.01)
妊娠中毒症	35/355 (9.9%)	339/2318 (14.6%)	965/8293 (11.6%) (P<0.05)
妊娠貧血	34/355 (9.6%)	243/2318 (10.5%)	823/8293 (9.9%)
糖 尿 病	3/355 (0.8%)	22/2318 (0.9%)	52/8293 (0.6%)

表 2-①

— 分 娩 樣 式 —

樣 式	職 業 婦 人		家 庭 婦 人	
	數 量	百 分 比	數 量	百 分 比
自 然	2797	80.8%	6991	84.3%
吸 引	290	8.4%	568	6.8%
鉗 子	35	1.0%	71	0.9%
骨盤位牽引術	93	2.7%	157	1.9%
帝王切開	290	8.4%	613	7.4%

表 2-②

— 分 娩 樣 式 —

分 娩 樣 式	職 業 婦 人		家 庭 婦 人
	9 時 間 以 上	8 時 間 以 下	
自 然	284 / 355 (80.0%)	1853 / 2318 (79.9%)	6991 / 8293 (84.3%)
吸 引	17 / 355 (4.8%)	179 / 2318 (7.7%)	568 / 8293 (6.8%) (P < 0.10)
鉗 子	2 / 355 (0.6%)	17 / 2318 (0.7%)	71 / 8293 (0.9%)
骨盤位牽引術	6 / 355 (1.7%)	49 / 2318 (2.7%)	157 / 8293 (1.9%) (P < 0.02)
帝王切開	39 / 355 (11.0%)	184 / 2318 (7.9%)	613 / 8293 (7.4%) (P < 0.02)

表3 新生児の異常

	職業婦人	家庭婦人
出生時仮死	272 / 3464 (7.9%)	> 542 / 8293 (6.6%) (P < 0.02)
重症黄疸	209 / 3464 (6.0%) 493 / 8293 (5.9%)
呼吸障害, 嘔吐	31 / 3464 (0.9%) 89 / 8293 (1.1%)
先天奇形の その他	87 / 3464 (2.5%) 192 / 8293 (2.3%)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

最近のわが国の産業の著しい伸展に伴って、婦人が広い産業面において直接これに携る傾向が強くなっており、特に有配偶者婦人の就業数が著増している。このため労働という要因が婦人の妊娠、分娩に対してどのような影響を与えるかという基本的問題が関心を集めているにも拘らず、未だ医学的な解析がなされていないのが現況である。一方また今後さらに既婚婦人の就業増加が予想されている今日、このことはますます重要な課題になりつつあると考えられる。

われわれは勤労婦人(以下職業婦人)と家庭婦人を比較して妊娠前の月経歴および妊娠中の母体の異常、分娩様式、分娩時の異常、新生児の異常などについて、両者に差があるか否かを統計的に比較検討し、また職種別、労働時間別にも検討を加えてみた。